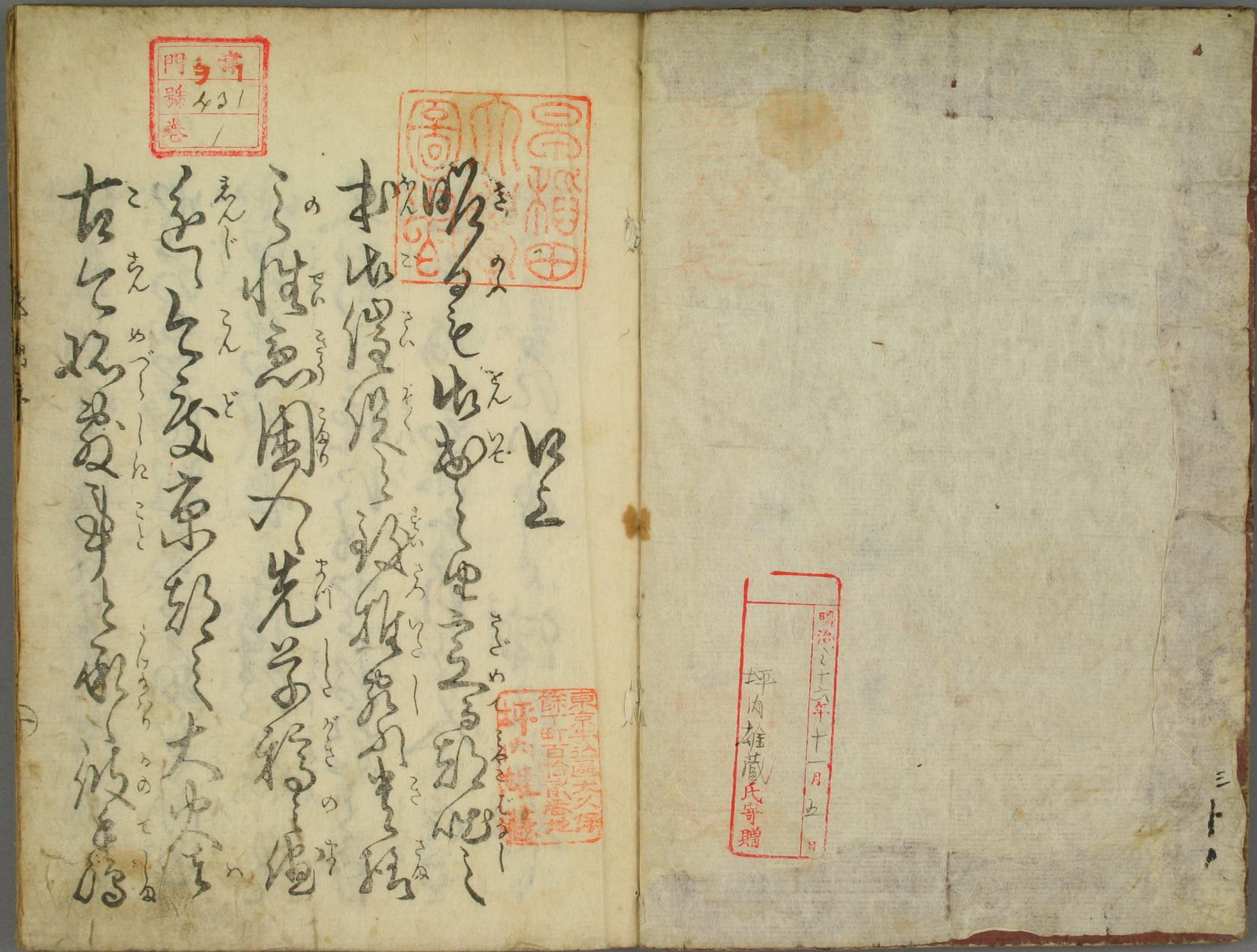
雜
13
一

7 1
431
1



請求門
431
巻 1

東京牛込區大久保餘丁町百拾壹番地
坪内雄藏

明治三十六年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈

何某が堂にほどなる樽を大
小いろ〳〵とりそろへ
小男共成長して後は樽
又酒にて種にもやはり樽
旦那なれば人にあるを
笑ふ者はいかゝ酒に左へ
[illegible]を嘗〳〵
如何成事なるか
[illegible]人にあるを中
[illegible]影なるまゝ
[illegible]又[illegible]
[illegible]ま[illegible]文[illegible]

事紙記せし小説とも多くあれ
ども用ひて仮名書にする事多
く其事を志るハ只小説あん
るを知のみ是亦紙面にて
手枕草人

花紅葉都噺

目録

一 焼失の次第并焼失時刻の考
一 聖主賢佐上下安堵し忽ち繁栄し世とうるゝ万民業を楽む事
一 神社佛閣町数竈数焼失し数九の異人書
一 火災ふ分稀〻し奇特の事
一 諸名家詩歌連俳の事
一 聖代有難き正律あらゝ法民楽〻と業に

このしむ半
附録
花の都現在揃
菱地語

花紅葉都咄巻上

天ふ之笑ありをの〳〵時を定あり〳〵ぬ乃
時ふいとゝしい堯舜文武の御世とそもゝ笑ひを
先はゝのあるとゝびとうやさしだ平安城都を
四神お意万代不拔の帝基ようゝ山川地
秀麗人物の温和ようそのふるもゝきゝりね況や
四時の政令享祭意ゝとゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ白馬乃
節会ようを小洗の儀式ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ風
調ひ雨順ようゝ時ゝ意ゝ万民を平れ化成

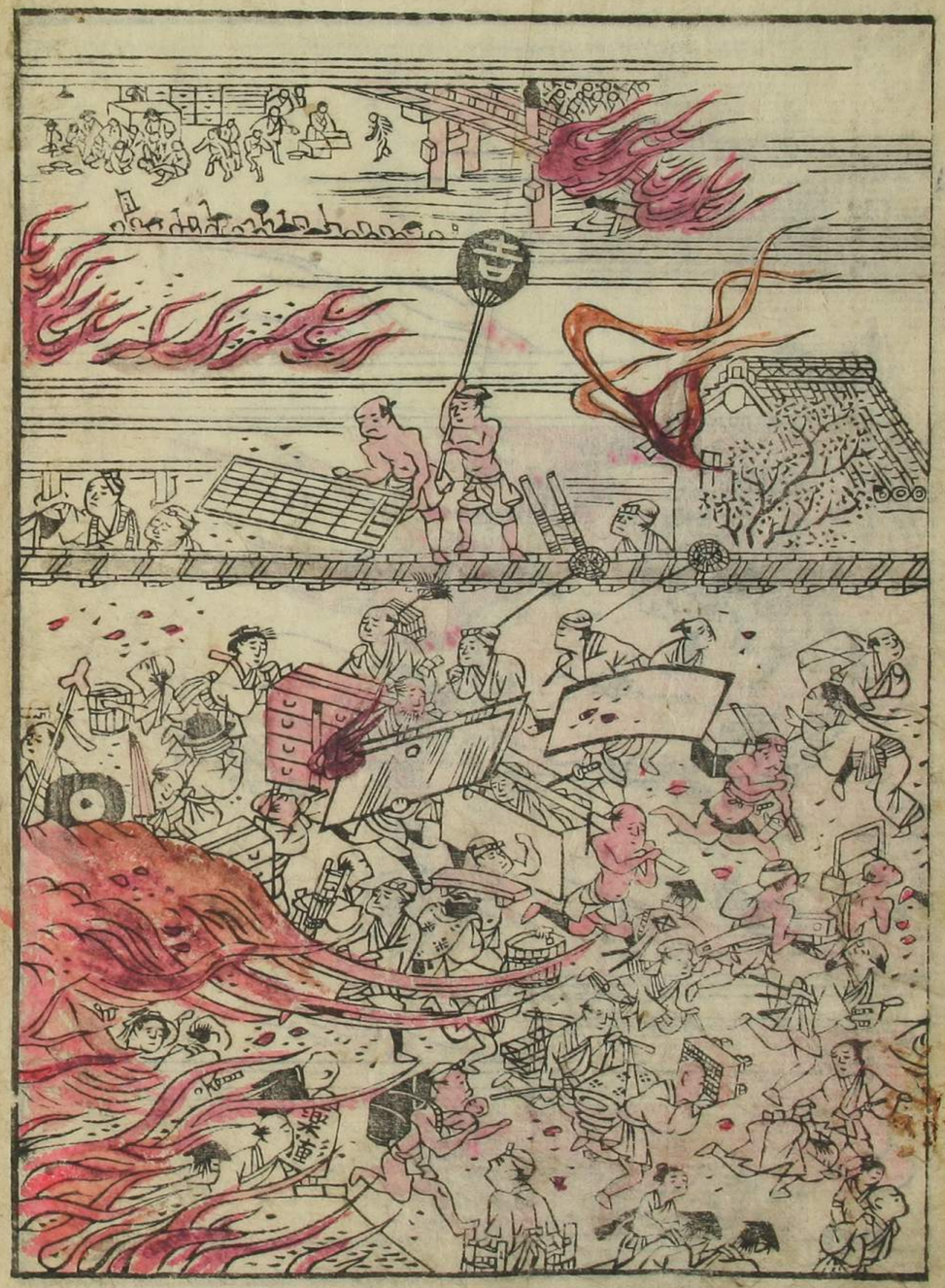
東京帝国大学図書館

このごろ歌舞伎楽ふ様子春の花秋の月と詠ぶ
いつもさつぱりとして夏は加茂川の納涼小袖沼
杯なくもけ冬は市巷の雪に東郭ぞ履紙
倒すべし四時をもつぱらこのごとみ尽せ者なし
貴も賤も徒らに名利に頓の産業安堵なり
外うつ否極泰来の理なり毎へば天運邪
時運なるかな今ごろ天明八年戊申の春正月晦日
京都の大火六本朝累世の旧記もいまだかつ
まなく焼ぬとぞ二月廿九日夜亥の刻

酉より子丑の方より風起て丑の刻ふいてふきくい
ぬ小刻しく寅の下刻より寅卯ごろふき吹く強よ
人馬も倒ゆ〜なりてとうりしぐ辺暁卯の上刻治東
園栗の辻子（禁城の巽方く暗ぐ方丈記に記せし安元年中の大火も都の巽方なる富小路
極により出火したりとうん）新道の巽辺角やしたる西智
店伝の家とうやいを伝人家の溝壁の空やより出火
そとうん打しも暴風おたつふく吹立く小石迫
町口条下れ中程と南と文門町及び門端の
乃成又条橋通りと又六町半の乃あ坂一同小

燒ること五条の大橋中絶よりく中納言殿より北の方九
二十万斗燒落ぬ燒ぬるよりく桐千代殿くく人馬成
是より風辰巳の方より吹給り程火は吹ぬるの
ごく源中より順次し〳〵啊呼とゝ万内寺町通
仏光寺下ル所永養寺恩院の本堂の破風
へ燒ぬそれより清國寺永養寺南隣俗より蓮光寺と
へ移り去べしの万より萩の下通を西へやけぬる
仏光寺へ移り因幡茶師菅大臣の社へもゝり
又小の方へ六角堂その堂の御屋しき都くく此
あゝり結く燒廣ごり新入り時ゝくの万ふ千本
通壬生寺の邪ゝくく燒ぬけ南の方へ本國寺へ
移り辰巳の方へ五重大塔ゝくく火ゝり此塔
南の方へ例を西本願寺乃び奥正寺の一
山藝も結ぬゝとあせ内此塔北の方へ例を
くれば寺ゝ〳〵ゝ結ゝ〳〵ゝ本國寺
乃び五条六条の方へ都くく風上ゝれども消ふ
燒去ゝり吹廻して七条西東本願寺乃南境
ゝく燒廣ごり都ゝ中京下京の万ゝ烟成

巻之〻おなじく顧みるのあとなどに東本願寺
いたるまでくい防ぎ止めしかども後西小の方より
焼来るくしかどなどに焼失と西本願寺と
大門并鼓楼のみ焼失しまた外まるし怪気
人も数多ありしとぞ此時興正寺門跡の諸堂
再建あるべく普請小屋多く立ならべ殊に危うく
しかど門主自ら指揮したまひしとぞ
今年洛内風巳午の方より吹始り
くに大雨ありしかば此時火はこれ勢とうり



雨の火勢ますます強く燃んに上京をさして
焼西へ東の方一筋八七条多の火は北より東へ
方へ堀数百町相数沛の丑寅より七条茶屋場
の北より下寺町より本百町川東町の多は北
条の北より焼北中通へ高倉をあ
ちらこちらの多は火勢はげしく
ちらこちらに西へ北へ二條堀川の方へ焼西へ
西の方は一筋も堀川多ゝより土御門寺あちらこ
千本通へ北へ北の方へ焼のぼりて多は

御屋敷方二条千本通の数多の御役屋敷
残らず焼失せしと（焼けたる所とあれば委しく記さず平に焼失るの分は巻末にくはしく）
記したる所は焼たると志るべし是より中筋の火と一同に
焼のぼりて西陣が焼通り北は紫野今宮乃
御旅所跡迄も焼ぬけ又は又風戌亥
の方より吹起りて禁庭の御方忽ちあやうし
其より次第に亥子の方へ吹廻り洛中洛外
御所司代始より御城内及び神社仏閣町
家残る方なく焼尽して洛東頂妙寺及び

寺迄新地二条新地の在家不残焼失せしは
法輪寺（俗に達磨寺と云）の北の方町家まで焼止る
風筋は大方北におこりけれどもいへども
此日の大風一定ならず一度は西一度は東或は
北或は南棹のごとく舞あがるごとく実に狂風と
いふべし既に朝六ツ時石垣町が出火し同じ八ツ時
因幡堂佛光寺より壬生の外迄を焼たりし
が本國寺の焼しは暁の七ツ東本願寺は其夜
八ツ時に焼たり是かく風筋定りかたきゆゑ

ある べし 尋常の出火ふあらば 始終かくの如く
うれば一度は焼滅りうとやうもさんざく 焼
めぐり吹狂く 都の地火ば 消さば灰燼 とうな
奇怪の事ふぞあり 京東山より始終 民家
うし人の通ふしは常の火 のとは事 異り火へ
風に押 まく地を立て 烟の内よりつくとそこ
よりとある間忽ち二三丁もあるとふよりうく
とある風のうめとしたれくどと火のよ
あるべしとぞ夜の寅の刻ばよりうと風し

おうしうめく一同ふ火のよ立のごり常れ生
火のごとうあるとうや様ふ怪しかりしう
上京の火は東南の方へ廣さ下京の火は西北へ
吹靡く中京の火宇宙に立登りうこ内外
鞠のごとうあるとは二抱もありぬうんと思した
火の玉風順を焼うばば右左に飛うけり辻
火の粉る赤織をのごとうもうで一面ふの紙
を焼しごとく忽ち灰燼と成しとうう毎日
の夜より翌日の暁より至内と桂津河内大和

和泉丹波丹後迄若狭都て十四人里乃
方へ火光騰結成深るがごとく雲に映じ日夜の
ごとく焼の光成かゝるせと
晦日朝日の海へ白益に火光雲烟にうつり
て路程二十里の外やゝ遠のごとく見へしと
なかくて京の火消大名及び左國北番の
所方も退て死つる東西奔走といへども
防ぐべき方仮もなく火已に御所迄ふを存
ぜしに集り来火防ぎ守護

しまれて夜に入て俄に風雨烈しく火勢
益〻熾なりしが時に雷鳴を始め縉紳家一支
所に火移らんとせしに防ぐべき方仮なく四
方の寺院に撞成つくこと音を響く
しが鐘成つくこと音を響く
地下の百姓ども共人共人づゝ多くを生の櫃下さるを
入て水成汲来て桶の
水を湯煙とうりて花敷しとぞ人家
い数の吼くごとく堂塔の崩るゝ音雷の如く

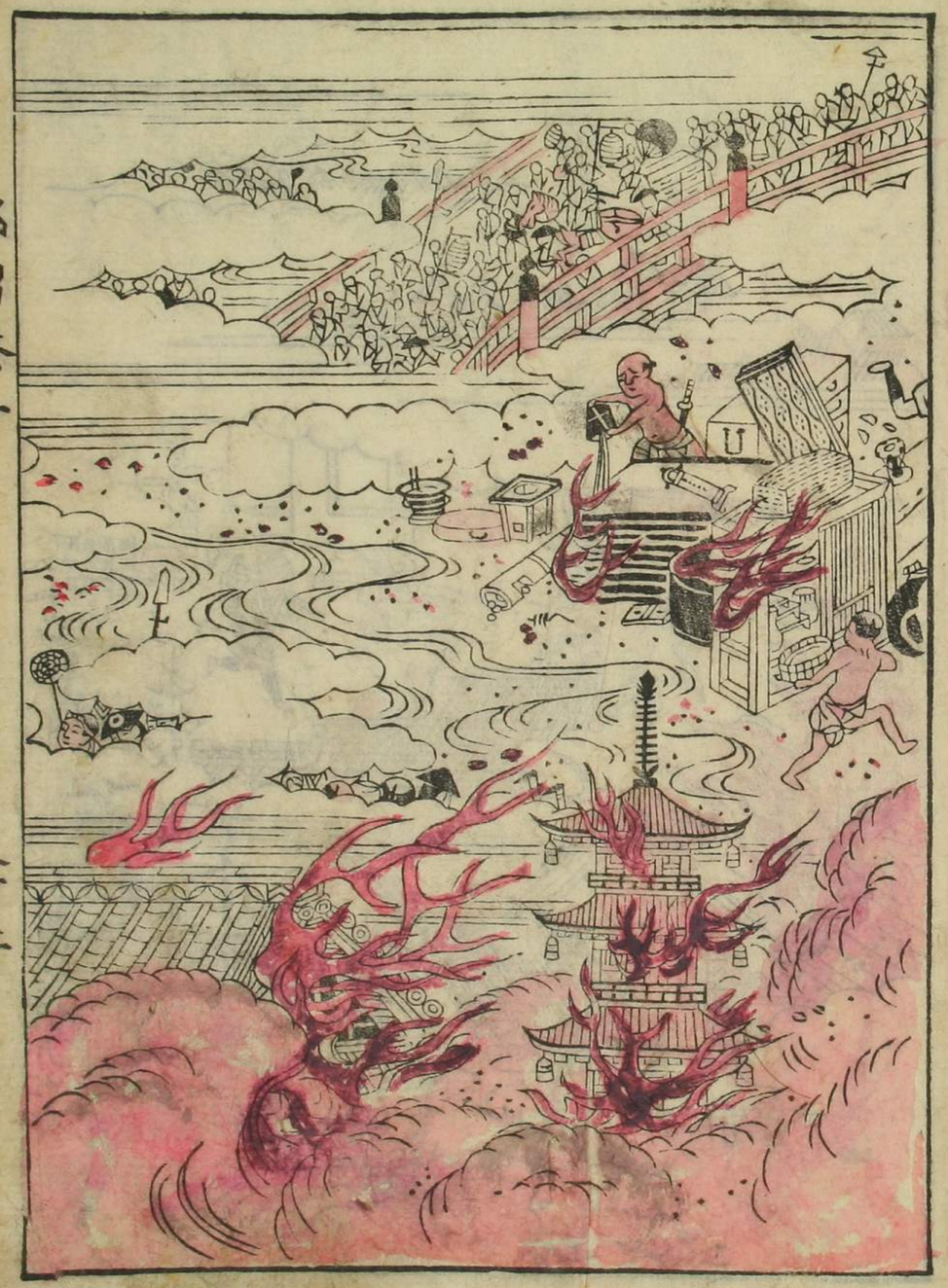
ふくにてこゝ〳〵くをほよひぐさ猛火雲
炎焼く見る炎月たくくりの〻地を滿つとい人
ども魂炎失ひ身のてどむ不炎去てば
畏き驚るかざるいかるうし沫ふ塗数日ふ動り
くゝ雨いよ〳〵ものとくねじく電を落し砥炎
おごゝ恐しさいうん方ふるしゆいう邦
廣大の花蒲世界只一屋夜の烟塵と化し
上一人より下士庶の家に至はまぐて遺
うく家秘の珎器什宝数炎尽しく焼失と

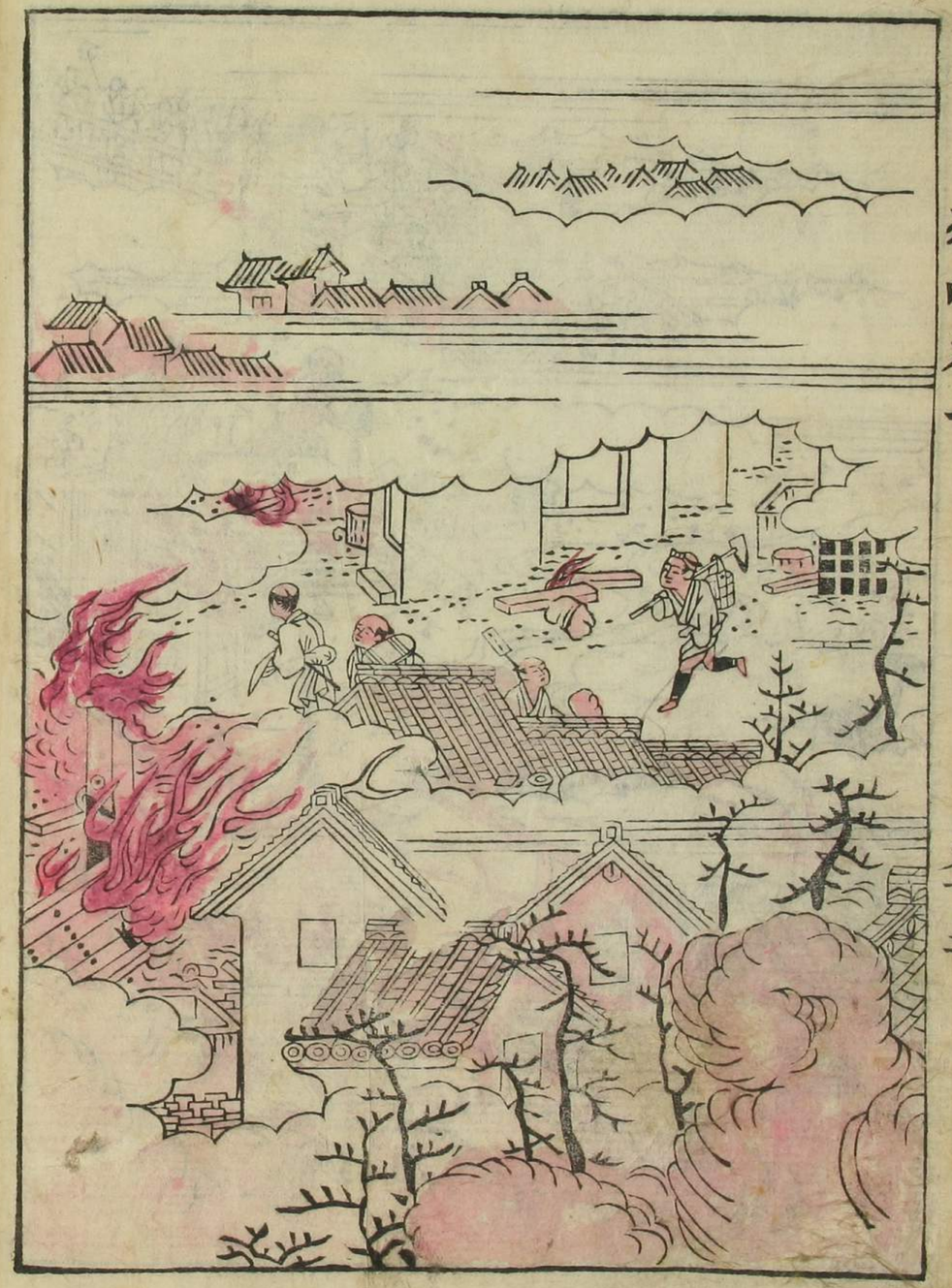
と嘆は天ふるふ
抑此度の大火は昔よりもあるしかるに
寛永年中の火は今も猶とつくく恐しかるの
うれど京の町十分二分ありとうむう應永
の頃迄の火も古記よりをねじく記しうれど
中〻此度の大火ほどの及びしと中昔略の長明が
方丈の記と記せば大風大火地震飢饉などの
つゞくく書されば身の毛もよだつ
ど火ばかりとふるちくくれて京の内こゝ一

分の焼うりとは祇園の火を洛中洛外九分五厘の焼うりと始東風ふく海東より下京乃焼時上京より新書の人々弛あり門ゆり火燵の家々敷ひしゃ者乃ふ相風火燵火花〳〵四方に義礼せーくべ上京のうち焼うりとは祇園社乃人々大よ弱ゝたちひく小さとゆ我宿所をくんゆれだいり〳〵烟火の内に焼れく住居しゃ者よも只人とうと住も還俗も只烟火乃中

うれゞ親子兄弟夫婦主僕もこゝろ〳〵新義〳〵身ひとつ所ふも道を弱く右往左往小逃やうゞひ或いろみすゞつあるひを焼く死を乃のを形乃者ゞ老人小児のうあく取けられく加茂川の廣場へ出るといゞも猛火四方より乱れ吹うけ眼〳〵みをゞ人ゝるしみ涙さけゞ数人乃泡の如音さ焦熱大焦熱丸外うゞびこれ乃中ゆもやうこふ〳〵しく出うた半もありとあ内律儀

鄙源の名ことく京うた伯父の家に来ひ
こゝ毎日こゝ内を見付くるくるのふぶせ
つゝ泣り茶よ水よとあり乞ひて御正乳分ねる
後ふ見まゝ都かゝく似たるしゝ乳ぬ今うり
しとう衰うるおさうたこの乳母子を行よ
小抱さ行よふ然ば抱くのれしにのすゝ
急うりられゝ然ば井戸へ投こゝんくく
探くこの方ば井戸へ投迎られゝやゝくこ
分む少の内へ飛入つゝ宝くうりぬと





これらをも下婢とも家を去る所人といへ
どもまた或人家内の器物一つも顧ることなく唯
父母なんどをもけてのがるゝはあらの人ぶし
いかなるのけものとをもへしこれバ
今しこの焔と成うゝん成富よ
何をおしこんひ物さん
と嘆く出るうちなげけ家を捨てうく物り家
内の調度一つも失ざりしと見やと大孝子
のこゝろ感じこの孤家やうねうと去やしらを

外題うたへ紙をうつすべと再びあらうて
ゆり烟ふむせびうく死しうと只惑をうく義よあ
ゆうと蔡つうく焼死人もありとこのあひ
中く発狂の書うけをべさ西ふあべ
只不思議うるへひ法病ある人れ人ゆべ
此火ふんく忽ち正常とうり寿婦ゆべ
俄よ出産せしも多しと見うん昔永源寺
の冥祖寂室禅師宋より帰朝の時紅中
よく刺病ふ病みしあひしゆ俄ふ風あし

く紅霞くんとせしふ遊くとて病ひ忽ち全
しと同じ紅ひうくんされば豊二千禅師ゆ
周丘流に病ふ月幻世と説とうも却り
そやされば火いいよく燃んよ西ふのうくん
焼ぬけそとより西法の方ふふへ紫邦の
赤と焼ぬけぬ此月風もふし強りけとお
所所の所方へ遊とさ世のくんとかくん内
夕アふふくく忽ち西ふの方よ恵雲ふ
潰とべくく起るよとうんる程よ悪風乾の方

より吹立くる煙ひ霧へ近ぬ物へ見に如わく
殿上の公卿ゆかせんと議しのゝ而ゝを國守
僦の大名市用意あり〳〵遥〳〵入給しこゝ
おぼ尤奈良絵かるし　玄蕃寮をとりて以
ども猶り小人が遥遥ぞ　市風輦が守僦
ゆ〳〵物の市見もう〳〵市人騒ぬ出御
ゆ〳〵ゆきを生ぬ有ゞ〳〵ぞかゞ人侍ぬ
しぬ市所の宵祇が又人〳〵そまり〳〵人の
哭ぬ鞠が投うけぬ御ごゝた火焔あるや

宮殿ぬ蔵ぬかとおり人ぐゝ〳〵ぐゝ四方ふちり
く風殿が犯をゆあるとゝ見る人奇
異のおをひが〳〵し感歎ぞぬ〳〵
〳〵〳〵　市風輦　出御〳〵と等し〳〵
見烟寮ひ市り火焔匂ち　宮殿ぬ蔵ぬ
市幸のおり〳〵と供をの公卿方道を〳〵
家〳〵の市和おどもわゝ〳〵有〳〵とゝ
見けるやむ烟の道におり人ぞよ
若ゞ市幸のつゞかるゝと

山市郎ふるど市供の公卿方の市おうりとろ
ゆ〳〵し倭國れ風雅優よ絶うり市ふ乃ふも
いとあるなくそさうん仕りかくく堂上方の
上藤姫君も者〳〵東山小山の色へ逃を思
いせうあひりれい常をさびしれ山ちうぐも
出人うん位の住居しうりぬ又加茂吉田
こう外社家官家の武士方ら絶く市縁
家市一門の上藤方ふしをけ出しうり
右刀ふ乃ふく社朱ふ拂ひうあんぐそ

されば時移り余焔猛盛なる親族
しも妻子を焼死なるもあり背を焼
うげきをくれ巷のそこかしこの人の
死せるを見るに見や父母のうと情深き
それぞれ妻子をうしなひ妻子のあり姿
おかしうるどもあるもありまたい親子
夫婦めぐり逢へるもあり或は幕
うの怨しみうらこともあり悲歎のた
ひ骨砕け恩愛その涙血を流さぬ人くの

んのうちなのよ哀嘆の嗚呼はしの日いかなる日
そや昨日は梅柳嵐に織つる管絃雲に傳し
大都は一夜の一面の瓦礫場と変ずる
の守護の神も力及ばざるかされば日に
抑上宮養より下士庶に至る家に
焼失ひ人の治中治の社家寺院
及び町家農家に寄食ひ大家を二百人
二百人小家にも人十人の住ひ
しに焼出りし義なるに遮柵して住ひ人

多し或人の口ずさみふ
人後せず家も仲床もるうろ
蓋の戸おの焼の夕暮
又伏見城小山を大津のあたりまで人
の充ざる所もうくうの塚をとめく
他ほよ寄る者ハ京の中より十が四うりと
うん又内塚うたくハ焼ゆ入ハ京ゆ
に遊うちしたて雨嘉ゆしてるさ夏ゆ
いうん方ゆし或人の語りしハ雨降夜あま

よの窮ゆ知ちるかよゆ人ゆ怪しとゆひ
ゆくゆゆゆ人ゆの泣く知ゆりしと
かくて洛中ハ惟一面の焼野と化し西街南巷
のうちうくこ糸九間も残ぬこと之うし
ゆし昔意仁の乱後ゆ飯尾彦六左衛門が邸ハ
野色の夕ひぐりわゆ人ゆ歌ゆ涙
ゆとゆ人ゆも今目のおふんくゆ者ゆうし
ゆ実や東方雲ゆ拂ゆくゆ百姓ゆそゆ天日
の面ゆ見東ハ轍ゆ同し文ハ行を同し賢君

上ハ百官ハ賢佐下ハ聖主德政施し
万人ハ忠臣國ハ治ル遠ハ京師の市新田代
義所市奉行いづれも神明の才あり諸国
しの包括國ハも猶ほ人賢ハ賢ハ
ハ稱くの市仁政なれこそ
市觸ども諸人民ハ恵みを
蒙風ハ流し靡雨に浴し万民業を
しむこそ有ら慈けれとされば未だ
ゆ雲も
ゆ雲ハ巷陌繁盛境を分ち十

万の人家も半ハ新たに立ち〳〵家減り
ひはあり〳〵も人ハ見や上の膏澤下万民
に及び有ら〳〵ん事たとへん方なし

附録

花の都唐揉

扨も京都ハ昔後仮遠本普請なり遠く成就
して花系二条などの繁華の地に豪富の住居
いとふ新殿立ち〳〵て見るとハ〳〵も上京の
あらハまで仮建さへも後〳〵に櫛比乃至家

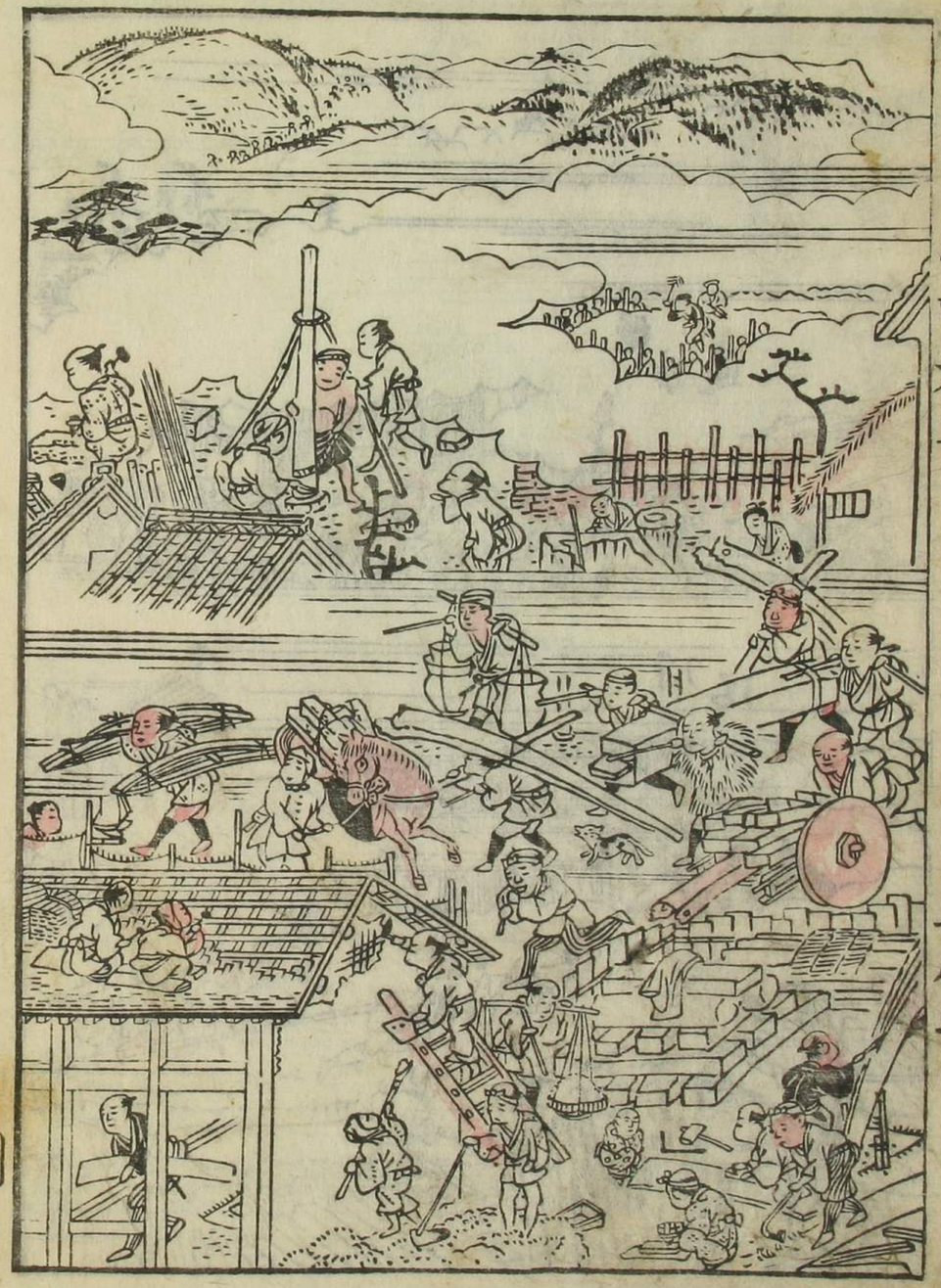
又ハ系譜人伝記とせし寺社方ハ記しの人之
しけるとゝ又或御寺杯ハ二十間四面乃仮
御堂ハ月中旬より漸ク十日ばかりの御日どり
ふく建立とうやうの一宗の感ずるやうに戸
大坂いつふ及ばぬ伝奏の奥筑紫乃ちく
ようもそひしくの寄進ゝの御地築の祈り
ゝの兵糧ハ紙に尽し難しゆゑ時ハ
いの強ゝ拙ゝうりしされば被御寺杯諸國
の進ゝ追ゝ寄進ゝ伝ゝと使ゝうゝを國

諸宗の業家ゝを〻〻じゝと金銀伝本寺ゝく
寄進し拙ゝ出ゝ伝ゝ紙ゝ出せゝも本
普請ハ未ゝ御中ゝふけ出ゝ〻〻仮建伝
ぞゝ〻〻れゝりゝれゝれば公卿方の御仮居も
東山北山の寺院ゝ伝ゝ〻〻七条九条の
左ゝ所の家ゝ〻ハ系ケ谷寄ゝ家あゝれ
農家ゝ入ゝ世ゝひゝく怪ゝ紙ゝ世ゝ
紫の幕引ゝ牛部やゝ御乗乃亟
所ゝ御ゝふ西陣の織ゝの所ハ當時普請

のゝ岳もうゝく悉く禁作雲林院多乃左
家伝うの住居こゝ家職をいとうむ世乃
中小市者の音うゝくゆへ又彷彿管絃のさゝべへ
へさるとたさてゝ樹音に蕩て牛吠るはうゝ
ど新ゝ教嶂の新ゝとひゝゝくゆへおかした
在の方稜とゝうりぬされば市武家あゝ多
くゝ東ゝ仮居しゆゝべ建仁寺町祇園界
新恩院町下ゝの京ゝ一軒の空やもうゝく縄
ゝ筋ゝ公卿ゝ皇居に通ひゝの道とうり

祇園
四条通
踏る

縄手通
堀川



ぬ去程に大火のほのほ東の住家も焼そめ〳〵
とゝひの外焔家の棟ひいなおに倍し山名殿の
鑿宋日夜蘭香焼之味線沢の流もうく洛中乃
ふゞ〳〵に成程に茅かゝり彩下のかし
居の御乃に新せだく居る〳〵び柱木の安賣
鍛のかゞ焼之度毘沙門さい馬道男
のはてにたゝに形あゝり在客のゑ者ゑくも
仲居花車ゞえやゞり新〳〵つゞけさ武家
い侍人の髭口のへの字形ゝ小形ゝ公家の優

麁人位冠ぐしく鉄鞭もつまくるぽぴんくの
殖子店やつくりくの庵人菓子ぐまてぐも
よりどりを小刀をの店うる棒のちちんちん
ちんの名古屋の敷のどんちくつつ四方八方入やじつつ
こる大盤ひお代未世の繁昌花の都ちちち
今どんのはあちらやいちうちんち糸は
礼の田舎のもさぬけ糸りの鼻これ狐やぐく
濃家の疱瘡を乳が腫痛と中焼酎ぐ糸の家
の毒さ眉間の皺がこの訴ちく伸ち立訴の

煙が立ちちひちちく煙ちく伏ちく下ち
蔦の巣をくむ沼花はも沼ふる海陸
麁よ古つふゆりちるぐ光ちちちちく
市稼さ反に貝物子焼どく釜ちち京嘲
ちちち添ての茅古竟
美ちの姫
上京一糸堀川の名小田丸や伊糸といく
糸ちのを者ひせしく人ち小商売正月
中旬傷寒この病ふちちち人半も安へぐり

しゞ正月廿九日下京より出火しゝく狂風火
勢かゝとをけ忽ちに十いらんとすれ
ども上京へ一里余の間ぞくもあれ
ば若くに家をひあるはじと業諸してあり
ケ所ゞ忽ちの外三日の暮ふ五つく俄に上
京に飛火しゝく富所をく焼失しやう
といへ程こそあれと迫而の騒動なりけ
れども大傷亡の事なれば命はもさる
に去ゝざりしゝかも妻子どもおとりて何

いせんといへ程不義中の系いゝくもうた
中人長持ふ押入くふ本あるれ所色々ぐ
ゝたゆさおろしいたるおしのりの成るよ
ゆりしが吹くゝ所火編へはうゝ来るも
うゝざるゆへ系入うる長持を保ちを
さうるが盗人ども有りまりはうわかし
名級の類うわ有ゝんうゝげ村所中ゝく
綻称ゝうう長持ふ本お被所基音の箱ふこと
へてる初ゝくゝみゝへ日ふひゝたてあゝる

さぐりまはれども方々はなかりけり
しばらくありて入くる所をみれば鬼ども
が呵責せんとくくケ様なりし檜皮お所なるうらん
されども素婆婆にあらざりしかば
半もうさぐつもしいざ出くれ断つとやさば鬼
どもの命ばかりはいづくにか長居なりぬ川
とといひつるとばかりうらひく髪も乱とやつれ
果しる姿うれば婆人どもの形をけしく迎
ちりぬあらばまたくやみまく遥東

南の方と覚しくてだらくと燃る火よ人
のとあるを叫ぶ都の地獄あれを見めく
母前地獄うらぶしく罪人どもの猛火ぶかさ
と鬼どもぶの責せらるる音やんあるべし
いうもしてはぶの道ゆゆどもとどひく
行よあるとより火よ暑るるる馬どもも
うれてうけ来るさくい畜生道もとどひ
ともくとゆくふ女ともく光さるものども
人の扉ふくを引立てまるあるさるぶ

く只今爲しくるり名麁人成まやで世
界よりごそつどもの一と来るまくぞあるん
とんふこそろ成遠ゐとうるとこるとしくく
こ不成行るがわるこ小一の堂あるく灯明
つとうふ人名れば潮こどりくてをづこるる
小あくく恐し堂の内小名んま大王作生神と乃く
列成ふ像行こて並びの人こ見うん名やで
小くく中こる名仏の聴うるべこと思ひ恐ふ
流づたくいくよの系後の安婆よありしとた人

ゐ行うとこしも桜世びく人のものいぬびみこ行
半もふくく打くく念仏もや行り宮めく麁科
も行くく行くんに桜小よ遠りあうとこいくよ
こふくくの五このもふくいこうるめふあべこと
打くく恐入くくうやくく新こあげくく新の内
遠くふう孫の音念仏の新れ世へうりこと世で
西方極小の上ふ上生こうるべくと思ひくいる
くいんぐんに敬ひくく私安婆の付生人
小て行り観音さ仏世ひくく月系をこ手けこと世

ゆ人よく所賀荘嚴の蓮臺の上ふのぐせ
ゆられと為くゝ思しの中に人あらとそれを
賢人どものあとり迎るを追うけく赤恥に
カ引徳い俊成ろと怪しみ泣く大勢の
あげく新ふでそこの像に人あくいく人
ゆうそこえ出るのにうる人て気の遠ひこる
ゆやこいよ本の名ん生雲と気ぬ者めれ
よといに正まびさ者ぬ会仏しくあり
うるぶ松すく夜いのぐと明こるあか

こ成ろふ松の樹義ろ岡の名ふ花禮ろき
く今廣風ふどうく国ひ見しに女ふどの
俄個ふる成ろく見ろ月ん主へ松ふろんと
ゆぐこ美人花さゆゆ人ぶよくくろふふ丸
人ろに異うる半ふ人ふ赤ふたくこ赤
成ろふあるとより去る友人ありこれを
いかにとふ初めく孫のんふり美のさめ
ろぐこふてようくころんとど船岡の郭名ふて
あこりの人若ふ成さけて去ぐしけ雨ふ俄

うるりこのもとにあゆみて傷寒乃
熱もこゝろぐるしくさわがれ身はまこに冷汗
出しかたへ一門妻子親もなく家もこゝろぐるしくこゝ
万生は苦患の世とこゝろ得さこゝろ見と菩提
の種とおもひ髪をそり衣をそめ仏つよ
入ぬしかゝ親生ぐるこゝろ乃ぬぐりこゝろ
付ぐこゝろ中〳〵世俗ゝ流ゝこゝ
いけ仏のゆゝに加こゝろこゝ仏衆生縁起と
仏のこゝろ人〳〵火事にあゝ一切苦〳〵仏

しゝものうゝたるこゝろ世ぐも菩提の縁ゝ
ゝるゝ〳〵ふゝゝ苦智識ゝく付〳〵ぞやされ
べケ極ふ長をのぐゝりゝ付ゝも実ふ太平
の道りのゝく世繁ゝれぐゝそもぐ嘆のひゝも
あり実ゝも彼男のいゝぐく世繁ゝれぐゝそ
四時長りのぐゝりもゝくゝゝあゝとゝふゝ
つけゝも君のゝみけゝもゝゝくおゝ
やゝゝゝ人〳〵ゝ火災ゝのゝゝ万民業仏
ゝゝゝみて都の繁花りふ百倍せゝぞ国仏

ゝゝたゞ日もゝるし志べし宰弓成ゝゝん
ゝゝく机にうくゝゝ志甜成僧しぬ

哦花嘯月謫仙醉　石枕中衾陳博眠
清福初知今日樂　竟風聲雨太平年

花紅葉郁咄巻上終

知口巻